

天理日仏文化協会こども日本語講座の取り組み⑪

5) 6年間の取り組みで見えてきたこと (前号よりの続き)

漢字ドリルによる漢字指導の成果

本校の日本語教育は、教科書の音読練習を基本として取り組むとともに、学年相当の漢字の読み書きと語彙の定着を図るべく、漢字ドリルによる本格的な漢字指導を始めることになった。

しかし、日本の学校では半年かけて学ぶ一冊の漢字ドリルを、年間34回の授業日数のうち2回の発表会日を除く32回で学び終えるのは、教師と子供たちの双方にかなりの負担を強いる挑戦でもあった。

事前に教師間で申し合わせた指導計画(7月号資料参照)によると、授業の開始30分以内に漢字ドリルによる漢字指導を行うことになっていた。ところが実際に始めてみると、90分の授業時間の大半を漢字ドリルに費やすなど、指導する側もされる側も要領が掴めず時間がかかりすぎてしまった。そのために、教科書の音読や内容の理解にかけられる時間がなくなり、予定した単元の進捗が遅れるという心配もあったが、一単元を終えるころになると、教師も子供たちも漢字ドリルの取り組み方にも慣れて、前回の復習テストと、その日の新出漢字がスムーズに学習できるようになってきた。

こうした漢字ドリルによる指導によって、ひらがなでさえ苦労している子供たちを日本語嫌いにするのではないかという懸念もあったが、好奇心旺盛な子供たちは漢字に大変興味を抱き熱心に学習に取り組んだ。それは現地校でふだんにしている表音文字のアルファベットとは全く違って、表意文字である漢字には一つ一つ意味があるという点や、ドリルに書かれている漢字の成り立ちなどが、子供たちの目には新鮮に映ったのだと思われる。

ただ、これまでも述べてきたように、日仏バイリンガルの子供たちは、個々の能力や家庭環境などによって日本語の理解力には差があり、文字の習得に関しては特にその差が表れる。各クラスに2、3人はいる漢字の形を書き写せない子供たちには、教師が大きく正確に赤ペンで訂正して、その上を鉛筆でなぞらせるなど、一対一の声かけと細やかな支援が必要だが、どの子にもきちんとドリルに書き込ませていくことで、「漢字が書けた」という達成感を味わわせ、少しでも漢字に触れさせるために、それぞれの個性と理解能力を見極めつつ粘り強く指導を続けなければならない。

昔から「習うより慣れよ」というが、1年間の授業で、毎回繰り返す漢字の習得パターンに慣れると、学年が上がるに連れて複雑になる新出漢字の練習にも抵抗なく取り組み、毎回の小テストを通して、正確に覚えるこつも掴めるようになるのだ。

読解プリントの導入

音読練習との相乗効果で、漢字の読み書きと語句の意味が分かれると、教科書の内容をより深く理解できるようになり、ほとんどの子供が、教師の質問や読解プリントの問題にも正確に答えられるようになった。各クラスの日記や作文を見ても、子供たちが、学年相当の漢字や表現を使えるようになってきているのが分かる。

2009年9月からは、漢字ドリルに加えて、より文章の読解力と表現力を養うために、新学社版の学校用教材である形成プリント「学習の整理」を導入した。各単元がA4版で2、3枚

にまとめられており、復習の宿題としたり、授業中にワークシートとして書き込ませたり、修了テストとして評価の参考にするなど、クラスの状況に合わせて使うように申し合わせた。このプリントの問題は基本的なものに限られ、挿絵も教科書に準拠して入っているので、余った時間に塗り絵をするなど、子供たちは楽しんで文章の読解学習に取り組んでいる。

日本と同じ教材による計画的な指導体制

また、保護者からは、日本の教科書や漢字ドリルなどによる指導のお陰で夏休みを利用して日本の学校に体験入学をさせた際に、子供たちが自信を持って授業に参加でき、すぐに学校生活にも馴染めたという話をよく聞く。日本の学校側にとっても、同じような教材で指導を受けているので、日本語のレベルが分かり、受け入れクラスの選定などの準備体制を整えやすいはずである。

その他にも、全校で教材を揃えて授業内容の歩調を合わせる利点は、教師の煩雑な教材準備の時間が軽減され、コピーの経費も抑えられたことが挙げられる。何より、教師が余裕を持って授業に臨むことで、今まで以上に理解や行動に問題を抱える子供たちへの配慮ができ、しだいに学習態度も落ち着いてくるなど学級経営上の効果も大きかった。たとえ、進級してクラス担任が変わっても、基本的な教材と授業内容は変わらないために、子供たちの戸惑いも少なく、計画的に学力の定着が図れるようになってきた。

こうした取り組みによって培われた日本語力を土台にして、子供たちは最終目標であるバカロレア準備クラスへと進むのである。2008年9月に開講されたこのクラスでは、バカロレアの試験官経験もある大西正子講師による専門的な指導を受けて、難関の試験に臨むのである。近年は、本校の生徒が、第2、第3外国語として日本語を選択し、満点やそれに近い点数を取るなど好成績を取っており、希望の大学への進学を果たしている。このような実績は、本校の誇りであるとともに、子供たちや保護者にとっても、日本語学習の大きな目標となっている。

成績表の作成

さて、これまで本校の指導体制を見直してきたが、それと同時に取り組んできたのが、責任者である天理日仏文化協会長の名前で渡す成績表の作成であった。子供クラスの開講以来、能力差のある子供たちへの評価を数字で表すのは困難だったために、各担任が文章による保護者向けの成績通知を渡してきたという。しかし、文章表記では生徒数の増加に伴って教師の負担が増えるばかりでなく、学校が統一した評価基準による成績表を渡さなければ、授業料を納めている保護者への責任も果たせないのではないかと考えたのである。

そこで、担当の小林氏と試行錯誤しながら、日本の成績表の様式を参考に、学習に対する評価を上からA、B、Cで表し、日仏国際結婚家庭の保護者への配慮から日本語とフランス語を併記したものを作成した。なお、成績の他にも、学習態度や出席状況とともに、裏面には学年末の修了書を印刷した。これによって、子供たちの学習の成果が記録できるとともに、日本語を学ぶ国内外の学校への転校の際には、日本語能力を表す貴重な資料として提示できるようになったのである。